

## 顔(おもて)

ただ何事もかごとも 笹の葉に置く露の間に

笹の葉に置く露の間に

さるわか 「これは今評判の阿国一座で、さるわかと呼ばれる者でござる。

京は四條の河原にて、さて今日も幕あけなれど、阿国の姿

いまだ見えぬに…

やあやあこなたに

阿国 「潜んでいたが と阿国は出しも、

さるわか 「さて大入りの見物衆が

待ちかねた

阿国 「なにを待つやら

さるわか 「そりや阿国を

かぶき踊りを見ようとして

阿国 「その舌の根のかわかぬうちに、古びたわざと捨てるのは

さるわか 「強いて申せば

世の中の常

阿国 「それと知りつつ御所望とは 真綿で針では ないかいな

さるわか 「平たく申して

それも世の中

阿国 「阿国を棄てて世もすてる」

追ふさるわかを 振りはらひ

四条河原へ 出てみれば

川の向こうで 鳥どもが

群がる先に 晒されて また つつかれて

骨もあらはな さらし首

点々てんと

いつそ されこうべになりおほせば

さだめし心も 安かろう

それとも昔が恋しうなつて

流れぬなみだを流すかと

思ひは至る この身のうへの

おもていた  
顔は舞台に晒されて

ひと  
彼女をかたるはもうよしに と思へど

ひとたび名を借り評判を

とつたが因果 身をあぶる

ほのほと知れ

離れられぬは阿国が顔

荒れ野は べうべう  
渺々と視界をふさぎ

ふりむけば

黒きもの ながく行列なして

この背に 張りつく かげ法師

われは 独り

向かひには 死臭腐臭の入り乱れ

こなたの岸は

矯声罵声の入り乱れ

まなか  
その真中に しうしう  
啾々と

川は ながれて

おくに 阿国よ 紅に

こがね  
黄金を集めた 伊達だてすがた

どれ かぶひてみせう

と 艶然と 阿国が笑めば

おおそれならば

このさるわかが露はら<sup>え</sup>び

ひとつ陽気に まいらうよ

何せうぞ 一期は夢よ

夢の夢の ゆめの世を

ただ狂へ

---